

「家がいいね」 第54号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2008. 11. 10

私たちはサル以下なの？

「朝三暮四」と言う中国の故事があります。宋の国に狙公という人がいた。猿を可愛がって群れをなすほど養っていた。ところが家が貧しくなつたので、猿に与える餌の茅(どんぐり)も減らさざるをえなくなり、猿たちを集めて言った。

「お前たちにどんぐりをやるのに、朝は三つで暮は四つにする。足りるか」とすると猿たちは皆起ち上がって怒りだした。そこで狙公は言い変えて、「それじゃ、朝は四つで暮は三つにしよう。足りるか」と言うと、猿たちは皆平伏して喜んだ。

元の故事はだまそうとした訳ではないが、目先の違いにとらわれて全体のことにつかぬことや、知恵のある人が知恵のない人をまるめこむことに意味が移っていった。実は9年前、同じ故事が「定率減税」への警句として挙げられたらしい。2年前にその廃止で所得税が増えた事は、まだ憶えておられるだろうか。今回「定額減税」を景気

対策とし、将来の赤字を覆い隠し、またも何兆円も投入するのは、狙公でも考えないに違いない。猿の代わりに私が怒りたいのは、医療介護福祉の(命の代償の)費用を毎年2千2百億円減らすための片棒を、心ならずも担がされているからである。政治屋が自分の金の如く、国の金を左右するのを、どうあっても喜ぶわけにはゆかないのだ。

わたし舟

『ありがとう』と『さよなら』がいっしょになるのが在宅ホスピスケアなんですと、内藤いづみさんが友人の大阪の詩人、里みちこさんの詩を紹介されていたのが、ずっと心に残っています。

岸のほとりで 舟(たたず) むひとが
対岸(むこう) いくのに 橋がない
わたしでよければ わたし舟
ちよいと送って いきましょか
岸に着いたら 名も告げず
ただのひとこと「おげんきで」



映画「おくりびと」から

「納棺師」という主題に誘われて、観てみました。看取りに関わる私達が、それまでの関係を頼りに、エンゼルケアを行うのと違い、まさに「遺体」になってから始まる関わりでは大変な心遣いになるだろうと予測をして観ました。

主演者が、青木新門さんの著作を長年温めて、映画化に至ったと知り、驚きました。父親役の峰岸徹さんも、自ら遺体役を買って出られたように

に思えます。緒方拳さんのT.Vドラマの「風のガーデン」と同様、がんを抱えながら最期まで仕事をされたことになりました。緒方さんは、在宅ホスピス医としての役割で、里帰り中に入院を強く勧めた息子さんに、「望まれるなら私が最期まで責任を持ちますから」と優しい言葉の対応をされました。映画やドラマで、人生に沿う落ち着きが表現されるのは、嬉しいことです。

やがて季節は12月

暦では「立冬」を過ぎました。ストーブを本気で準備しています。

インフルエンザの予防接種は、年内に済まされるように、お願いします。

健診は、12月20日で終了します。

本年の診察最終日は、12月27日(土)

来年の診察開始日は、1月5日(月)の予定です。

8日間の休診期間の間も、訪問診療や訪問看護は必要時に予定しますが、準備にご協力ください。



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県伊勢市御園町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105
mail homecare@kr.tcp-ip.or.jp
<http://www.tcp-ip.or.jp/~takuro>

